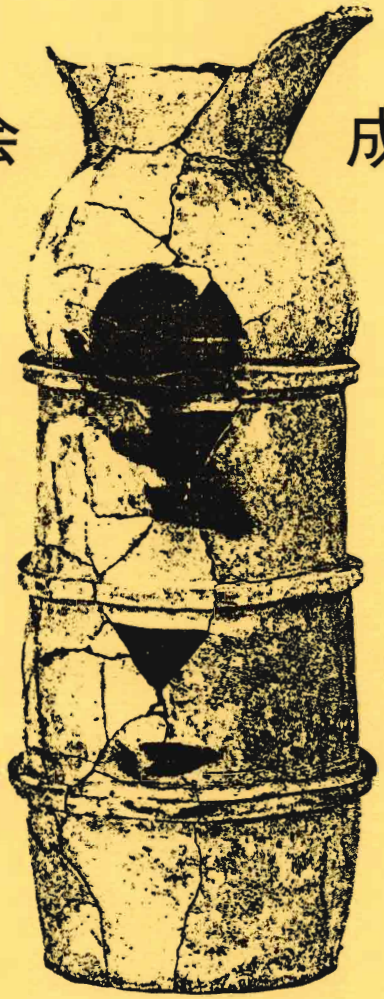
考古学入門講座

神奈川の古墳

―その出現と展開―

討論会　成果集



出　席　者

遠藤秀樹　　服部みはる

浜田晋介　　立花　実

鈴木重信　　西川修一

稲村　繁　　野本孝明

2000. 3. 5

神奈川県考古学会

討論

村澤（事務局）　討論を始めさせていただきます。壇上の遠藤さんからお願いします。

遠藤　おつかれのところ、２時間少々の時間をいただきたいと思います。

討論に先立ちまして、私の方からお話をさせていただきます。まず古墳の出現と展開について、次に討論の柱についてです。

「古墳」は、弥生時代の共同墓地（方形周溝墓群）から独立した特定個人の墓であるということができます。しかし古墳となると、それぞれが階級差をもつことと、盛り土をもつこととが条件となります。しかし、このような条件を満たす「墳丘墓」は、弥生時代にすでに日本各地に存在します。５ページをお開き下さい。

遠藤秀樹氏

大阪府加美遺跡には方形台状墓という墳丘墓が、島根県には仲仙寺山１２号墓という方形の四隅に突出部をもつものが、瀬戸内には双方中円形のものや前方後円形のものがあります。関東地方にも神門４号墓という円形のものがあります。

これらの墳丘墓の特徴的なところ（要素）を統合（飛躍）させたものが古墳であると、岡山大学にいらした近藤義郎先生は定義したわけです。そして、出現期古墳には地域差がないことから大阪大学の都出比呂志先生は、この政治的集団を「前方後円墳体制」とよんだわけです。

古墳への飛躍の要素とは、山陰地方の墳墓に発達した墳丘の突出部が前方部に、墳丘に石を貼った貼石が葺石に、瀬戸内地方に特徴的な特殊器台形土器が円筒埴輪に、九州地方にあった鏡を副葬する習慣、巨大な石室の中に木棺を置く等です。

しかし、関東地方は畿内とは接触はなく、主に東海地方の勢力と関係があったようです。それは、関東地方の各地から、東海地方の土器が出土することからもうかがわれます。

弥生時代の関東地方の墓制は、方形周溝墓ですが、この墓制の伝統をうち破る動きが出てきます。というのは、方形周溝墓の一辺を掘り残して陸橋にした形態のもの、円形の墳墓、剣・玉・鏡といった副葬品をもつものが現れてきます。こういった墳丘墓の段階を経て古墳時代、つまり前方後円墳の時代に入っていくわけです。

出現期の前方後円墳は、前方部が三味線の撥形をしたものです。棺の中には、鏡や武具、農耕具が収められられます。次の段階には碧玉製の石製品が加わり、滑石など玉や模造品にと変化していきます。さらに大王墓では甲冑も加わります。

そこで、本日の討論の柱としまして、まず、①方形周溝墓の伝統をうち破る動きが県内のそれぞれの地域ではどのような現象として現れてくるか。次に、②首長墓としての前方後円墳や前方後方墳、円墳は編年のなかのどこにあたるのか。それから、③出現期古墳が次代の首長にどう受け継がれていくか。最後に④古墳時代の土器や集落についてお話いただきたいと思います。それでは、①の柱をすわっている順にご発言願います。

浜田　川崎の例を申し上げます。川崎では、方形周溝墓の伝統をうち破って、新しく古墳作りへ動くようなものは今のところはっきりしておりません。つまり、今遠藤さんが言われた方形周溝墓の一辺がとぎれてブリッジ状になっていく傾向を示す方形周溝墓は発見されておりません。しかし、隣接する地域で発見されているのでこれから発見されるのではないかと思います。

ただ一例お話します。高津区に久地伊屋之面古墳という４世紀末から５世紀初頭の築造の小円墳がありますが、この墳丘下に方形周溝墓がありました。つまり、かつて墓地として使っていたところを次代も墓地として使った。つまり、墓地としての伝統にのって墓域を作っているということがいえます。 以上で終わります。

鈴木　横浜は、レジュメの１５ページに関連資料を載せておきました。横浜はどこでも方形周溝墓という形態をとっています。形態は、市道高速２号線ＮＯ．６の事例を見ますと、溝がコーナーでとぎれているものもありますが、基本的には溝が全周するタイプのものです。ここは、弥生時代後期後半から墓域が営まれておりまして、３号墓や５号墓のように、築造時期が古墳時代初めまで下る例もあります。

それに対しまして、東耕地遺跡や稲ケ原Ａ地点遺跡におきましては、集落の一角に方形周溝墓が築かれますけども、東耕地遺跡では２基連接した形で検出されております。これら２基は１号墓が先行しますが、２号墓は１号墓の南側の溝があるため、北側の溝を省略しております。稲ケ原Ａ地点遺跡では、集落の一角に単独で一基検出されています。それから、基調報告のなかで言いました、権田原遺跡という弥生時代中期後半の集落の一角に、古墳時代前期まで下る住居群があります。その縁に３基並列して検出された事例もございます。

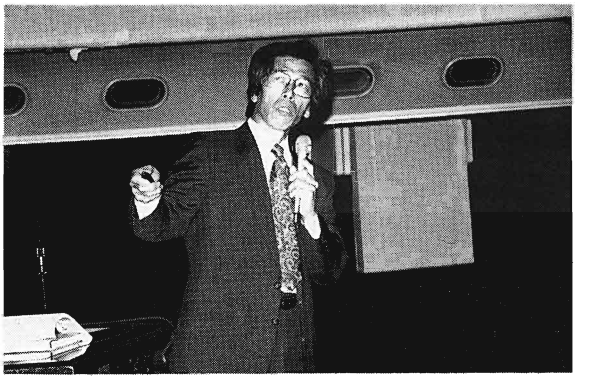
また、これも基調報告で述べましたが、１６、１７ページの東野台古墳群は、柏尾川流域に、虚空蔵山遺跡は鶴見川上流の早渕川流域にあります。これらは定形化した古墳に先行して営まれる墓を含む例です。特に、東野台古墳群におきましては、台地の裾部に弥生時代後期から古墳時代前期の集落が存在しますが、その背後に古墳群が営まれています。ここでは、３号墓という方形の低墳丘墓が前方後方墳に先行して築かれます。虚空蔵山遺跡の方形周溝墓からは、築造時期を示す副葬品等がありませんので、はっきりしたことは言えませんが古墳に先行するものではないかとされています。

もう一つ、虚空蔵山遺跡の北側にある観福寺北遺跡群関耕地古墳群の中から検出された方墳群の中の５号墳は、残存状況が悪く不明な部分が多いのですが、溝の状況から方形の系統のものであることが明らかにされています。そこから出ている遺物から５号墳が一番古く位置づけられるのではないかということで、調査を担当された方は、めだった墳丘があるようなものではなかったと推定しています。

このように、集落の一角に営まれる方形周溝墓から後に方墳が営まれる丘陵上あるいは丘陵の先端部に立地するものが現れるという動きがあるようです。

こういう観点でみてみますと、未調査で何もわからないので、すきなことが言えるのですが、稲荷前古墳群の中の１６号墳か、作りかけの６号墳から作り始められたらしいのですが、その後に前方後円墳の１号墳が続き稲荷前古墳群では、首長墓が作られなくなります。ここでは虚空蔵山古墳群や東野台古墳群の様子を参考にすると、稲荷前古墳群の中に

実は気になる古墳がありまして、図にはないのですが、１６ページの２段目に稲荷前１６号墳の墳丘測量図がありますが、この図の左手、つまり丘陵の先端部に近い一段低いようなところに立地する１７号墳でございます。これにつきましても現状で保存されていて調査もされていません。墳丘測量図も公開されていないのですけれども他の遺跡の様子をみると、１７号墳は１６号墳に先行する時期のものである可能性があります。



鈴木重信氏

ですから、定型的な古墳が突如として丘陵上を選地して作られ始めるというパターンだけではなくて、その前の段階でめだった墳丘をもたない方形系統の墓が同一の敷地内で営まれるということもあったかと思われます。

なお、稲荷前古墳群も加瀬台・日吉台にも弥生時代後期の集落の存在が確認されています。このことから、前期古墳と弥生時代後期の集落が重複している例が意外に多いようです。また、詳細が公表されていない資料ですが、大岡川流域の殿ケ谷古墳群は前方後円墳３基を中心として作られていますが、この古墳群におきましても、小規模な集落が墳丘の下から確認されています。

そういう方形周溝墓から前期古墳への変化のなかで、前代の様相については、資料不足ながら状況としては以上のような事例が目につきます。

稲村　三浦半島では午前中の基調報告でも言いましたように、弥生時代の方形周溝墓と壺棺墓という墓制は４世紀代まで続くらしいのですが、正確にはいつまで続くかというとわかりません。だいたい、４００年前後として考えています。

平面形がどういうものかというと、横浜市の稲ケ原Ａ地点のような前方部へ発達するようなプロセスを示す形態のものというのは確認されておりません。三浦半島の場合、全体のプランがわかる調査事例が少ないものですから、何ともいえないのですが、わかっているなかでは周溝が全周するものが多いという程度しかわかりません。

その中で、方形周溝墓の伝統をうち破る墓制ということで、箱式石棺と洞穴内埋葬があるということです。箱式石棺は、一例しかありませんので何とも言えないのですが、いずれにせよ、伝統的な墓制にはみられなかったものということで、位置づけられるだろうと思います。洞穴内埋葬に関しましては、棺が置かれるのは洞穴内ですが、棺とその中は古墳の内容と全くおなじものを持っているということが特徴として挙げられるだろうと思われます。

これらの墓制が方形周溝墓が終わって突然出てくるのか、方形周溝墓をやめさせて作られるのかは問題があります。といいますのは、雨崎洞穴遺跡の舟形木棺は、子どものものではないかと言われています。また、舟形の配石墓もあり、伸展葬ではないので、首長を埋葬するために洞穴が使われていたかということになりますと、それを示す例は三浦半島にはない。ただ、４世紀末から５世紀前葉にかけてそれまでなかった葬送形態として洞穴

内埋葬というのが登場してくる。それが直接高塚墳への出現とつながるとは思えないのですが、洞穴内埋葬の内容が、その時代、日本国内の古墳の様相と一致していることからして、新たにそれまでの方形周溝墓の伝統をうち破り古墳時代の古墳の墓制を受け入れ始めた証しではないかと考えています。

服部　東相模の地域ですけれども、古墳時代前期まで続くと思われる方形周溝墓はいくつかあります。それは、海老名市本郷遺跡、藤沢市大庭城址遺跡、高倉遺跡です。しかし、前方後方形の周溝墓は今のところみつかっておりません。私の考えですが、いきなり唐突に秋葉山古墳群が出現するようです。未調査なところもあるので、発見される可能性はありますが、段階を追って古墳になったという印象はありません。古墳と方形周溝墓が、場合によっては併行する時期があるのではないかと思います。

立花　西相模は、方形周溝墓の伝統から一歩踏み出す要素と、それから前方後円墳につながるものとを分けて考えたいと思います。しかし、結論からいいますと、方形の墓からはみ出すものと、前方後円墳につながるものとは、服部さんがおっしゃったように、かなり開きがある。つまり、前方後円墳は非常に突発的に出現するといえると思います。

まず、方形周溝墓の系譜を引くものとして、厚木市大久根古墳、伊勢原市高森塚越遺跡をあげることができます。これらは方形のマウンドをもち、なおかつ群集しないで独立して立地しています。いわゆる集団墓から一歩抜け出した要素を持っています。方形系のひとつの発展形態ではないかと思います。

それから遺物の出方についてですが、平塚市の王子ノ台遺跡５号方形周溝墓の主体部から鉄剣が出土しています。弥生時代の方形周溝墓に鉄製の武器が入れられることは、それ以前の南関東には見られなかった現象で、大きなインパクトだと思います。また、その主体部の上から、高坏形土器が出土しました。南関東の方形周溝墓では、土器はほとんどが溝の中から出土します。埋葬施設の上から土器が見つかるということは、そこで祭祀を行ったことを意味し、それは古墳時代になって古墳の上で行われる祭祀形態に共通するものです。千葉県の神門古墳群など、特に古い古墳で顕著なものです。王子ノ台遺跡の例はこうした古墳祭祀のさきがけと評価できると思います。

立花実氏

次に、前方後方墳につながるものとして、低地にあります小田原市中里遺跡で、５ページにあります方形周溝墓の一辺の中央が切れるＢ－１式が２基見つかっています（註１）。それから、平塚市の豊田本郷遺跡でもＢ－２式に近いタイプが見つかっています。方形から前方後方型へとつながっていく要素が考えられます。ただし、現在のところ西相模で完全な前方後方型周溝墓も前方後方墳も確認されてはいません。その可能性が高いところが小田原市の千代付近です。この付近は東海西部地域の要素が色濃く見られますので、西相模で前方後方型のお墓が見つかるとすると、

最も可能性が高い地域であると考えています。

次に、前方後円墳につながるものですが、はっきり言って周溝墓からの連続性をうかがえるものはありません。厚木市と伊勢原市にまたがる愛甲大塚古墳、その隣の台地にある伊勢原市小金塚古墳は、すぐそばに古墳時代前期の方形周溝墓群があります。それまで方形のお墓しか造らなかったところに、突然円形を基本とした前方後円墳が造られるわけです。そうした意味では、平塚市岡崎の御所ヶ谷遺跡の円形周溝墓も突発的に出現してきます。出土した土器も、S字甕を三つ合わせたものですとか叩きの甕ですとか、外来的な特殊な土器が多いのが印象的です。こうした円形を基調とした墳墓は方形周溝墓の伝統とは別のところから新たにもたらされたといえると思います。方形周溝墓と前方後円墳とを直接結ぶものはありませんが、円形の墳墓の出現という意味では御所ヶ谷遺跡は非常に重要だと思います。

註１　近年こうした低地での一辺の中央に入り口をもつ周溝状遺構について、及川良彦氏が低地特有の住居を取り巻く溝ではないかとの説を出されている。その見解に従えば、中里遺跡の例も方形周溝墓ではなく住居跡の可能性がある。ただし、両者を分別する基準が未だ定まっていないため、その結論を得るにはもうしばらく検討が必要である。

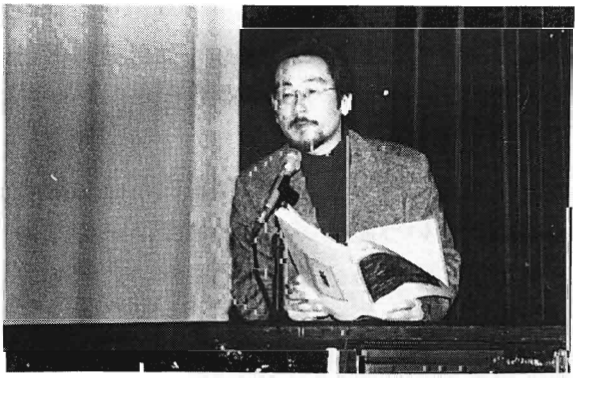
遠藤　ありがとうございました。会場のみなさんは、今朝配られた古墳編年表を見ながら話を聴くと分かりやすいと思います。レジュメの５２・５３ページにもありますが、小さくて見にくいので事務局の方に作り直していただきました。

さて、②の柱にいきます。

各地域において、前方後円（方）墳はいつ出現したか、そして、その根拠は何かということです。また、順番にお願いします。

浜田　川崎の場合は、白山古墳を一番古く位置づけております。基調報告でも申しましたように白山古墳は戦前の調査です。報告書をみますと、土師器が出土していると記載されていますが、どのような土器が出ているか報告書では図も写真も公表されていませんので、土器を根拠にできません。したがって、私が一番古く考えた根拠は、副葬品の組み合わせと埋葬主体部の位置づけとの２点です。

副葬品の組み合わせですけれども、レジュメの４８ページ３番の白山古墳には後円部に粘土槨が二つ、木炭槨が一つ、前方部に粘土槨が一つ、都合四つあると言いましたが、そこからそれぞれ副葬品が出ているわけです。けれども大きくみると、まず、鏡があり、鉄製の農具がある。そういうことからみて、これは、比較的古い古墳であるというのがわかります。これは先進地域であった畿内地方の編年に併せていくと、２・３・４期、その程度の編年になると思います。それ以上のことは副葬品からではわかりません。



浜田晋介氏

次に、だいたい２・３・４期にくるだろ

うということを前提にして、今度は埋葬主体部をみてみますと、粘土槨が三つあって、それよりも古い木炭槨があります。粘土槨を考える場合、畿内地方の編年で合わせますと、粘土槨は３期から出てくるという研究があります。基調報告のなかで、私が、白山古墳は、非常に畿内地方のルールにのっとって作られたと言いましたが、この粘土槨は、確実に畿内地方で作られたあとでなければ白山古墳には作られない。ということは、白山古墳は、２期には上がっていかない。これは、粘土槨を考えた場合ですね。畿内地方では３期の前半から出てくると言われているので、３期か４期にあたるだろうと考えています。白山古墳は４期くらいでおさまっていたわけですけれど、粘土槨に先行して作られた、粘土槨より古い木炭槨というのがあります。これは、一段階古い３期前半くらいにもってきていいのではないか。その後から粘土槨が作られるので、３期後半から４期にかけて白山古墳（粘土槨）が作られた。では、木炭槨が２期に上がらないかというと、木炭槨からは舶載の三角縁神獣鏡とともに小型の倣製鏡がいっしょに副葬されています。舶載鏡だけ副葬しているものと、舶載鏡だけでなく小型倣製鏡をいっしょに副葬するというタイプは、畿内地方では後者のほうが新しいと考えられているので、その時期は３期以降でないと出現しないと言われています。その考え方がくずれない限り、２期にあげるのはつらいのかなと思って、結論を言うと木炭槨は３期前半、粘土槨は３期後半としたい。

もう一つ、伊屋之免古墳は土器から４期としています。

鈴木　古墳出現の話の前に、「方形周溝墓の伝統をうち破る動き」の中で補足させて下さい。

服部さん、立花さんから前方後円墳に視点を置いた話がありましたけれど、私の方も横浜におきましては前方後円墳から始まる地域というのは、日吉台の観音松古墳、大岡川流域の殿ケ谷古墳の２ケ所ございます。ここでは同一の丘陵上に先行する方形周溝墓あるいは低い墳丘を伴ったものが検出されていない。それに対して円墳、前方後方墳、方墳から始まる古墳群では、前段として方形周溝墓的なものが存在している。こういう点は注意しなくてはならないということで補足させていただきます。

古墳出現の時期ですが、今、浜田さんから加瀬白山古墳の位置づけについて話があったのですけども、１６ページの上段に関連資料を載せておきました。これが矢上川をはさんで前方部を向き合わせるように対峙関係にあるということは浜田さんの基調報告にありましたけれど、実は、この観音松古墳はですね、粘土槨が後円部に二つ、前方部に一つ計３基の埋葬施設が存在したと『横浜市史』に書かれています。ここに取り上げたのは、副葬品の一部ですけれども、どの埋葬施設にどの副葬品が伴っていたかは、客観的に明らかにすることができません。『横浜市史』をみても明確な記述がございません。それで、年代について加瀬白山古墳と対比してみますと、白山古墳にみられないものに銅鏃と紡錘車形石製品がございます。鏡は舶載内行花文鏡とされているもので、他に、短冊形鉄斧が出土しているという記録がございます。このなかで銅鏃等が手がかりになります。銅鏃は鏃身と茎の境、かえりの部分がハの字になっておりますが、このへんに特徴がありまして、類例のない形態をしています。したがってこの銅鏃の編年的位置づけは定まっていないのが現状です。

紡錘車形石製品は、もともと貝で作られたものを石にうつしたものですが、観音松古墳

では碧玉だけではなくて、右の二つはグリーンタフが用いられていることから、新しい要素をもつものとみられます。土器が明確でないのでわからないんですが、副葬品から白山古墳の中心主体部である木炭槨、つまり、白山古墳の築造時期より新しくなってもいいのかなと考えています。『横浜市史』の段階では舶載内行花文鏡をもって白山古墳に先行すると考えられていたのですけども ――― 。もう一つの根拠に白山古墳の木炭槨から出てくる鉄製農耕具・武器類の量が多いということもありまして、観音松古墳をより古く見ていた時期もあるんですが、浜田さんがおっしゃるように観音松古墳のほうを新しく見たほうがいいかと思っています。

一方、朝光寺原土器文化圏に成立してまいります稲荷前１６号墳と虚空蔵山古墳、観福寺北古墳群は鶴見川流域に近接した中で一方は、前方後円墳ないし１６号墳の前方後方墳から開始される。虚空蔵山古墳群では、円墳が方形周溝墓についで作られる。さらに観福寺古墳群の円墳につながっていく地域、もう一つは方墳の系統で始まって、しばらく方墳の系統でつながって５世紀中ごろに円墳が一基だけ混じるのですけれど、方墳の系統でつながっていく古墳群があります。

この中で稲荷前１６号墳と虚空蔵山古墳から土器が出土しています。稲荷前１６号墳の、右側の横にして撮影した土器がありますが、焼く前に底部に大きな穴をあけてある。そして、口縁部に段をもっている比較的大きな壺の類はすべて焼成前に穴を開けてある。いってみれば、壺形埴輪のような仮器としてつくられたものが、供献されています。これらの土器を布留２式期に位置づけ、編年表に置きました。

さらに、１６ページ下段、東野台２号墳の墳丘から出土した、図では左下になりますが、小型丸底壺がございます。これも口縁部に対し、胴部が小さい、口縁部の高さと胴部の高さが同じくらいであるということは、比較的古いということが言えます。編年表では同じ欄に入れてありますが、この一点の土器を対比するのはむずかしいのですが、稲荷前１６号墳と東野台２号墳を比較した新古が問題になると思うんですけれど、私にはわかりかねます。

稲村　三浦半島に関しましては、今のところこのテーマに該当する資料はありません。前方後円墳は６世紀後半に出現するということで、今の話には加われません。

服部　東相模地域ですが、前方後円墳の出現について一番古いものはまだわかりません。といいますのは、一番古いのは秋葉山３号墳だと思うのですけど、３号墳が前方後円墳かどうかはっきりわかりません。編年表をみていただくとわかると思うのですけれど、３号墳は他の地域に突出して古くなっています。墳形は前方後円という形をとっていたか今後わかるかどうかわからないのですけれど、慎重に検討していくべきだと思います。

服部みはる氏

秋葉山古墳群１・２号墳が前方後円墳、

４号墳が前方後方墳といわれていますが、あるいは前方後円墳という可能性もあります。築造時期は、１号墳の周溝の一部をちょっと調査したのですが、遺物が出ていないということと、２号墳が未調査であること、４号墳も一部周溝と思われる遺構が確認されているのですけども、こちらからも遺物の出土が不確定要素が多いものですから、「この時期」と特定できません。そうしますと、はっきり前方後円墳で年代がおさえられるものとして、主体部は調査していないのですが、瓢箪塚古墳までいってしまいます。そうしますと、４世紀末から５世紀初頭ということで、埴輪の方からおさえられていますので、確定的に言えるのはそこまでいってしまいます。しかし、瓢箪塚古墳が一番古いということはなく、秋葉山古墳群の中のどれかが一番古いと考えています。

立花　西相模の前方後方墳、前方後円墳について説明します。

平塚市の真土大塚山古墳が前方後円墳か前方後方墳、或いは円墳、愛甲大塚古墳が前方後円墳、地頭山古墳が前方後円墳といわれています。あと、平塚市北金目の塚越古墳が前方後円墳か前方後方墳のどちらかであり、その中のどれが一番古いかという問題になります。しかし、同じ材料で比べることができませんので、正直なところ判断が付かないということになります。いずれにしましても、『前方後円墳集成』の編年観でいきますと、２期から３期に納まってくると考えています。真土大塚山古墳は広く知られていますように、最初松の根を抜いたときに鏡が見つかったというのが発見の発端で、その後何回かに分かれて遺物が出土しています。戦後になって、緊急の調査が実施されましたが、その時もどの遺物がどういう状態で出土したかという記録はしっかりとは残っていません。これについては東京国立博物館の本村豪章さんが詳細に分析をされ、少なくとも埋葬施設が二つあり、遺物にも二時期が存在し、墳形は前方後方墳だろうと位置づけています。確かに、遺物には多少の時期差があるようです。それは、３期のものと、それより若干古くなりそうな一群です。さかのぼるものが２期までいくのかは定かではありません。埋葬施設が粘土槨だとすれば、３期に納まってくることになりますが、出土状況のわからない遺物だけからでは、確かなことは言えないようです。

愛甲大塚古墳については、円墳だと考えられていた頃には５世紀代の古墳と言われていました。それが前方後円墳であることがわかり、別の図でお渡しした周溝から出土した土器からは、一応２期ぐらいでいいのではないかと考えています。この土器には周溝の中と墳丘の下から見つかったものとの２種類があり、周溝からはたくさんの土器が出土しています。図示した土器にも多少の時間幅が見られますが、周溝出土土器の８割は古墳時代前期のものです。他に弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の土器が混ざっています。これは、古墳が弥生時代の集落を壊して築造されていること、その後周辺に古墳時代後期、平安時代の遺構が造られることによるものです。しかし、調査した範囲内では周溝の中から５世紀代の土器は見あたりませんでした。現時点では愛甲大塚古墳は圧倒的に出土例の多い古墳時代前期の時期と考えておきたいと思います（註２）。

ただし、埋葬施設の調査は一切されていませんので、粘土槨であるとか、違った時期の遺物が入っているとか、埋葬施設そのものが複数ある可能性も残されています。まだまだ動く可能性がありますが、５世紀代になるという積極的根拠は見られないと思います。

平塚市北金目の塚越古墳についても、西川さんからお話があったように、土器からは３

期、以前の調査で出土した管玉はからはもう少し新しく、５世紀代になるかもしれないとのことです。これについても、現状では何とも言えないところがあります。

しかし、周溝の中の火山灰を見た感じでは、愛甲大塚古墳の周溝を埋めていた火山灰と塚越古墳の周溝のものとは非常によく似ています。それらが同じ火山灰であるとすると、両者の間にそれほど長い時期差はなくなります。つまり、塚越古墳には複数の埋葬施設があって、ある時間幅をもって古墳が機能し、副葬品が納められたことになります。その火山灰については、こちらで進行をされている後藤さんが調査され、出土した埴輪から３期に位置づけられている伊勢原市の小金塚古墳でも、周溝の中に同様の火山灰が入っていたと報告されています。これも大きな時間差はないと言うことになります。それらが、同じ火山の同じ噴火による火山灰であることがわかれば、各古墳の前後関係がつかめると思います。

壇上全景

註２　その後、伊勢原市が調査した愛甲大塚古墳の前方部のすぐ北側を林原利明氏が調査を実施した。周溝の続きが確認され、愛甲大塚古墳が前方後円墳であることは疑う余地のないこととなった。しかし、周溝の下層から須恵器が出土し、その年代はまたしても混沌とすることとなった。以上は、林原氏のご厚意により、現地見学をさせていただいたときの見聞である。詳細な時期については、正式報告の刊行を待ちたいと思う。この結果により、愛甲大塚古墳が後期古墳になるのであれば、それはそれで大きな問題である。ただ個人的には、愛甲大塚古墳は中期を含めた前期古墳と考えており、近い将来、是非ともその結論を出していただきたいと願っている。最終的な判断は、より広範囲の周溝の調査、埋葬施設の調査以外にはないと考えている。

遠藤　３つ目の柱にいきたいと思います。出現期古墳の系譜は、どのように受け継がれていくかということです。

浜田　レジュメの１０ページの下の地図をみていただくとわかりやすいと思います。１０番の白山古墳は、１４番の観音松古墳に受け継がれて、４番の了源寺古墳にいくだろうと、そして日吉台に移り、１５番の矢上古墳、加瀬台にもどって８号墳、これはスライドでみていただいた方墳です。これが５世紀中ごろくらいです。ここで一旦首長系譜はきれてしまうという傾向です。途中１・２空白時期があるのですが、まだ調査されていない古墳が該当するのかなと。たとえば７号墳は径３０ｍの円墳ですが、白山古墳に近いのでそんな感じがあります。

鈴木　１４ページの分布図で説明させていただきます。加瀬台と日吉台の方は、浜田さんにやっていただいたので、私の方はそれ以外のところでお話します。

鶴見川中・上流域では、前方後円墳の稲荷前１号墳をもって首長墓の造営は途絶えます。これが５世紀前半です。

一方、早渕川上流では、虚空蔵山古墳から観福寺古墳へと円墳の系譜で連なり、観福寺北古墳群の中に受け継がれていきますが、首長墓と言えるような顕著なものではありません。また、稲荷前古墳群の５００ｍほど南に朝光寺原古墳群という３基の円墳群が５世紀の中ごろないし後半から、６世紀前半代に相次いで作られます。１号墳は、径３０ｍほどあります。この地域では大型に属する円墳ということです。そのころ、５世紀半ばをめどにすると、従来古墳が作られなかったところに古墳が作られてまいります。（朝光寺原古墳群もそうですが）この分布図でいうと、日吉台と稲荷前の中間あたりに、大熊町というところがございまして、円墳と方墳からなる４基の古墳群は、上の山古墳群と名付けられています。それと、対岸の弥生時代後期の大環壕集落である折本西原遺跡（７番）と同一丘陵上に円形周溝墓群が検出されています。周溝からは５世紀後半を中心とする時期の遺物が検出されています。対岸の上の山と近い時期にあたります。こういったところに新たに古墳が作られるようになってきます。

大岡川流域では、殿ケ谷古墳群が３代続いて、その後途絶えます。

柏尾川流域では、東野台古墳群の前方後方墳が１代で終了し、継いで方墳が作られるわけです。規模をみると首長墓とするには弱い。それに対しまして中流域では、富塚（とみづか）古墳という３０ｍの前方後円墳が現れる。

港北ニュータウン地域の調査は２０年をかけて、２５７０㌶の広さの中で、２８０の遺跡を調査しましたが、５世紀代の集落は限られた数しか調査されなかったという状況があります。また、５世紀半ばを境に住居に竈が敷設されるなど、集落の様子も変わってきます。この時期に古墳が拡散し、円形ないし方形に変化します。

鶴見区に前方後円墳の諏訪坂古墳というものがありますが、６世紀の早い時期のものです。それをのぞいてあとは、６世紀の中ごろ以降に軽井沢古墳、三保杉沢古墳、これらは横穴式石室を伴いますが、その時期にならないと再度前方後円墳は作られないという動きがあります。

稲村　三浦半島は、２２ページの地図をみていただきたいと思います。東京湾の入り口になります、金田湾を望む丘陵の先端に、長沢１号墳があります。編年表では７期に入っていますが、６期の終わりか、７期の初めに出てくるだろうと考えています。

稲村繁氏

次に蛭田古墳ですが、長沢１号墳の南に位置しますけれど、金田湾を望む丘陵上に立地しています。前方部がついていたという記録がないので、円墳と考えていますけれど、いわゆる初期須恵器という古式の須恵器を伴っています。この後、八幡神社２号墳というのが出てくるわけですが、北の久里浜湾の海抜３～４㍍の砂地の上に古墳が出現してきます。この後、６世紀半ばまで、砂地の上に連綿と作られて、最後に蓼原古墳という埴輪を伴う帆立貝形古墳として初めて円墳以外の墳形として出てくるようです。

藤沢地域でも、実は５世紀後半だろうと考えておりますが、境川と柏尾川の合流する周

辺の若尾山、スクモ塚といった砂堆上に古墳が出現してきます。両者の前後関係は、はっきりしませ。けれども、スクモ塚周辺では５世紀後半代の埴輪が出土していまして、この地域では５世紀代は低い砂堆上に古墳が作られております。しかし、６世紀に入りますと、台地上に朕ガ塚、江ノ島の辺津宮境内からも埴輪が出ていますので、どうも台地上に移っていくようです。

服部　基調報告の中で、東相模は北から南に向かって古墳の築造が移転してきているようだと申し上げました。北から秋葉山古墳群、上浜田古墳群、伊勢山古墳群、大（応）神塚古墳とありますけれど、古墳群それぞれが同一の系統をたどるかということは、わかりませんが、少なくとも秋葉山古墳群につきましては、前方後円墳が集中していますし、同一の系譜を追って順番に作られたのではないかと思います。

上浜田古墳群につきましては、秋葉山古墳群に比べますと、古墳の分布が散在するような形になります。これにつきましても、古墳群内でどのように変遷したかは、今後もちょっとわからないかもしれませんが、秋葉山古墳群との関係をみた場合に、一部築造時期が併行する可能性がありますので、関係するかもしれません。

大（応）神塚古墳は、埋葬施設からの出土遺物がありまして、これから５世紀代ということでひきだされていますので、秋葉山古墳群・上浜田古墳群・伊勢山古墳群は、距離と距離を置くということで、違うグループなのかもしれません。

立花　西相模で、墳形が確定し、主体部がわかり、副葬品が出土している例はほとんどありません。唯一副葬品がわかっているのは真土大塚山古墳です。三角縁神獣鏡をはじめとして畿内的色彩の強い副葬品を持っています。なおかつ、砂丘上にひとつだけ離れて位置しています。これと、北金目の塚越古墳が同じ前方後方墳であるとすれば、両者の関係を想定しなくてはならなくなってきます。しかし、立地からみますと、塚越古墳は沖積地を望む台地の先端部に位置する他の前方後円墳と同じグループと考えたい。ですから、首長墓の系譜を考える上では、ひとつだけ立地を異にする真土大塚山古墳をどこに入れるのかが問題となってきます。真土大塚山古墳が最初に造られたのかもしれません。そうであったとしても、位置、立地、副葬品からも、その他の首長墓とは同じひとつの系列と考えるのはちょっとためらいがあります。仮に、愛甲大塚古墳や地頭山古墳から三角縁神獣鏡が出土したということになれば、これらの古墳の首長を同じ系列として考えなくてはならないことになると思いますが、今の段階では別々に考えておきたいと思います。

また、地頭山古墳については墳形が最古の前方後円墳といわれる奈良県の箸墓古墳に似ていることから、４世紀のかなり古い段階に置くという考え方もあります。そういうことも踏まえて、各古墳の年代観が特定できませんので、それがどのように受け継がれたという問題についてはなかなか言及できないと言うのが現状です。

ただ、首長権の継承という点では、前方後円墳と同時に大型の円墳も無視できないと考えています。前方後円墳を中心とした各台地単位ごとの変遷を見つけていくこと、それを積み重ねていくことがこの問題の正解へ近づけるのではないかと思いますが、その台地ごとの変遷を考える上で、大型円墳は一カ所にかたまらず、各河川、台地ごとに分散して分布し、前方後円墳と同じ様な立地状況に造られていることが見て取れます。ですから、各

台地ごとに、前方後円墳との時期差、ランクを検討して、有機的なつながりを想定した方がよいのではないかと思います。

遠藤　野本さんにもうかがいたいんですが、多摩川下流域左岸で、宝莱山古墳、扇塚古墳、亀甲山古墳以降の首長墓を紹介していただけるとありがたいのですが ―― 。

野本　編年表にあるのですが、多摩川下流域左岸には前方後方墳は一つしかありません。ありますのは、世田谷区砧にあります砧７号墳です。この古墳は、古代の多摩郡の突端に位置し、出土した土器は、単口縁の台付甕形土器しかありません。また、鏡では小形の珠文鏡が出ています。多摩川下流域左岸では、前方後方墳はそれしかないので、編年的には４世紀の末くらいだろうと。多摩川下流域左岸で系譜上追える首長墓は、前方後円墳ないし、帆立貝形前方後円墳くらいです。平成７年の調査で宝莱山古墳は土器の年代と墳丘の形と築造でいきますと、一番古いだろうと。その次に、さきほど話しました扇塚古墳が、これは円墳だと思いますが、しかし、この古墳の掘っていないところに前方部周溝の可能性もあり、木炭槨の主体部が３つあることを考えますと、小形の前方後円墳の可能性が高いのではないかと。その後は１００㍍級の亀甲山古墳がくるということです。

野本孝明氏

その後に野毛大塚古墳が５世紀の初頭にきます。野毛地域で系譜的に遡る古墳は、この間新しく小形の前方後円墳と確認された西岡５号墳という、今は上野毛稲荷塚古墳といいますが、これは全長３０㍍近い前方後円墳で、粘土槨があり、いわゆる鉄剣を伴っていますので、４世紀後半、４期くらいかなと。

それから、西岡３１号墳とか３２号墳とかいった古墳があるんですが、西岡３１号墳から石釧が出ていまして、これですが碧玉製で極めて精巧な石釧、西岡３２号墳からは円筒埴輪が２個体出ており、おそらく５世紀初頭といわれています。ところが西岡３１号墳の石釧をみると、石釧は碧玉製ですし、石釧が出る古墳は大形の円墳か前方後円墳が多いので、おそらくいっしょになって小形の前方後円墳になるのではないだろうか。

あとは、野毛の地域に首長墓が移って野毛大塚古墳の帆立貝形前方後円墳、つづいて天慶塚古墳、これは墳形はわかりません、円墳かもしれません。そして八幡塚古墳、これは石製模造品を出しまして、主体部は、粘土槨が出まして、そこから十二乳文鏡が出てます。墳形はどうやら帆立貝形前方後円墳みたいです。さらに、御獄山古墳も野毛にありますが、この古墳からは三角板鋲留短甲が出ているので続くだろう。

５世紀末から６世紀初頭になると、多摩川下流域左岸の首長墓は多摩川台にもどり、全長６０㍍の前方後円墳の浅間神社古墳が築造され、多摩川下流域左岸には前方後方墳がなくて、前方後円墳と帆立貝形前方後円墳が田園調布の多摩川台と世田谷の野毛の地域を行ったり来たりというふうにして最終的には田園調布にあります全長４０㍍から５０㍍の多

摩川台１号墳や観音塚古墳などの前方後円墳で終わるということです。

遠藤　おわかりになったと思います。最後に４の柱にいきたいと思います。

さきほどから古墳の周溝出土の土器と副葬品の年代がくい違っているのではないかということにお気づきになっているのではないかと思います。また、４７ページに県内古墳の分布地図があるのですが、作られた事務局の後藤さんによると、昨年の弥生時代の遺跡と今日の分布地図の古墳の位置とが重なるらしいのです。つまり、弥生時代の集落と古墳の位置は同じところにあると言えるようです。

さて、神奈川の古墳出土の土器を、弥生時代の土器との関連からみてとか、神奈川の土器の形式はどこまでわかっているのかとか、土器にくわしい西川さん、立花さんにお願いしたいんですけど、よろしいですか。

西川　今朝配られた編年表をみながらお話します。進行の遠藤さんの誘導尋問のような気がするのですが、古墳の副葬品と暗に土器の編年があわないのではないかという主旨の感じ方でした。

古墳の内容ですけれども、不幸なことに良好な資料の古墳は戦前の調査だったり、工事に伴い破壊されたり、資料が未発表であったり、土器しかなかったり、土器がともなわなかったりしています。

土器の編年は、新潟大学で日本考古学協会のシンポジウムが行われたとき、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲというのを発表しました。シンポジウムに合わせろということでしたが、合わせられないので斜めに線を引いてあります。本日のレジュメの表とちがうところは、Ⅲの下に線が引いていないということで、できればⅢの線は新潟シンポの１０期、『前方後円墳集成』の４期のあたりに横に線をひいていただけるとありがたいです。

西川修一氏

土器の話は、会場にいらしている比田井さんに詳しくしていただけるとよいと思います。痛感することは３～４世紀の土器は股裂き状態というのが現実です。新しいものが出てくると、古墳の年代が古くなっていく一方で、神奈川なんかで個別資料を検討するとそんなに古くはあげられない。同じような土器が出る他地域では、３世紀後半だとか４世紀初頭という風にかなり遡及しているものも多くなっています。本日配布された編年表で３世紀に上がるものはありませんが、ただ、私見ではもうちょっと上げたいと思う古墳もあります。そういったところが研究状況ではないでしょうか。以上です。

立花　西川さんがおっしゃった通りなのですが、若干補足させていただきます。もともと４世紀初頭と考えられていた奈良県の箸墓古墳が、卑弥呼の墓ではないかと言われるようになってきました。卑弥呼は３世紀中頃、２４９年に亡くなったことになっていますので、箸墓古墳を５０年近く古く考えようという動きです。一方で５世紀半ばの須恵器は窯の調

査から年代が定まっています。おしりが決まっていて、頭の方だけ古くなっていることを股裂き状態と言っているわけです。そして、どうもその傾向はますます進んで、より古く考える資料も出てきているようです。

愛甲大塚古墳の土器が載せてある資料の裏側をご覧ください。西川さんのために作った資料なのですが、平塚市王子ノ台遺跡Ｈ４１号住居跡と同市高間原遺跡７２号住居跡の資料を載せておきました。王子ノ台遺跡は西川さんが３期に位置づけているものです。高間原遺跡はおそらく５から６期というところにくると思います。それでは、４期の資料はどうなのか、王子ノ台遺跡Ｈ４１号住居跡と高間原遺跡７２号住居跡にはどう見ても差があるが、これを埋める資料は何なのか、という問題が生じてきます。ひとつの候補として、王子ノ台遺跡Ｈ１２４号住居跡の資料を置いてみました。ただし、このような資料は少ないため、この変遷が正しいのかについては検証が必要です。このように、４世紀から５世紀にかけての資料は、今後かなり動くことが予想されます。それによっては、古墳の編年観も大きく動く可能性が高いと言えます。

昨年（１９９７年)、環濠集落のシンポジウムの席で、弥生時代後期の土器の様相が相模の西と東で大きく異なるという結論がでました。そして今回扱った前期古墳が、弥生時代後期の集落を基盤として成り立っていることが明らかになりました。それに当てはまらないのは、秋葉山古墳群だけだという報告がありました。神奈川県の前期古墳がそれ以前の社会的様相を引きずっていることは間違いないと思います。前方後円墳の出現が、かなり均一化した強力な波を被った結果であるとしても、相模川の西と東、南武蔵も含め、前提となる基盤にかなりの違いがあるわけですから、当然古い古墳のあり方はその違いを色濃く反映していると考えられます。そして、地域の歴史にはその違いが重要になってくると思います。

遠藤　ありがとうございました。これで４番目の柱を終わりたいと思います。

ここで、まとめと言うか、本日明らかになったことと、問題点の整理をしてみたいと思います。

今日の発表で注目できるのは、北金目塚越古墳で、私が『前方後円墳集成』には、５期の古墳だと書きましましたが、根拠は滑石製の管玉が、片面からの穿孔であるということです。それが、周溝調査の結果、３期となって副葬品と土器との年代にくい違いが生じてきている。同じことは大田区の宝莱山古墳にもいえます。

これを理解するには、年代の違う埋葬主体部が二つ以上存在する、墳丘下に弥生時代の遺構がある、副葬品が伝世品である、そもそも編年がずれている、などが考えられます。いずれにせよ、古墳の年代は、調査が進むことによって動くものだということです。

墳形も北金目塚越古墳は前方後方墳の可能性があるということで、墳形も調査によって変わってくるということがあるということです。

次に、北武蔵と南武蔵を比較した場合、南武蔵の古墳の出現が早まったということと、南武蔵が優位に立つのは『前方後円墳集成』５期くらいで、６期からは埼玉古墳群を頂点とする新しい体制が確立したからでしょうか。文献では武蔵国造の反乱ということもありますが、北武蔵に移っていく。しかし、首長系譜は細々と続くということです。

それから、秋葉山３号墳・愛甲大塚古墳・北金目塚越古墳の出現時期が土器の様相から

さかのぼって考えられるようになったこと、前方後方墳から前方後円墳への交代型もみられること、前方後円墳がおそくまで残る地域は三浦半島と多摩川左岸であり（横浜にも少しありますが)、多摩川左岸の古墳の出現は１００㍍級なのに、時期を追って規模は縮小していくということです。

さらに、小田原市の酒匂川流域でも前方後方型周溝墓がみつかったことから、これからの調査に期待されるところだということです。簡単ですが、以上でまとめとします。これで私の役目は終わらせていただきます。ありがとうございました。

村澤（事務局）　それでは、会場のなかからコメントをいただきたいと思います。中野区の歴史資料館の比田井さん、お願いします。

比田井　今日の編年表の分析の方法的なことで、感じたことを述べたいと思います。

古墳を取り扱うときに、どうしても日本では今日話題になりましたように、土器を用いてやる方法、副葬品が豊富な群馬や奈良では副葬品や鏡等で導いていく方法と当然二つございます。神奈川は、両者が入っているわけですけれども、ここで、表をみてまいりますと、ひとつ気づいたことがございました。と申しますのは、第一に編年表の左から『前方後円墳集成』編年・赤塚編年・寺沢編年、そして本題の編年の内容が入ってくるわけです。先ほど、宝莱山古墳の土器は野本さんと話をしたり、他の地方の人にみていただいたりして、赤塚編年の廻間Ⅱ式期の終わりからⅢ式期の初頭だとおっしゃる方が多いのです。私もそのへんあたりかなと思っているわけです。

それで、周溝から出ている土器がそのまま、古墳の年代にはならないわけですが、宝莱山古墳の場合、野本さんは副葬品も含めて２期のところに置かれている。『前方後円墳集成』の２期はよろしいかと存じますが、そのとなりの布留０・１・２・３式期、廻間２・３式期に齟齬が生じてしまうわけです。この表の線をずらして補正していく必要があるのか、それとも土器と古墳の編年は抜本的にあわないのかの二つになるわけです。ですので、あわないようにするのではなくて、接近させて考えるとどうしても三つの補正が必要です。

比田井克仁氏

私は、個人的には廻間Ⅱ式の１期の上の線が箸墓古墳の下の線あたりにきて、布留０式期の線が下にくると横並びで説明がつきやすくなるというふうに感じています。

暦年代は、ノーコメントでいきたいと思っています。

愛甲大塚古墳は相対的な表の中でいきますと、古い位置にしてありますが、これを布留１式期併行としてありますのは、土器からですね。もうちょっと新しくしてもよいかなと思ったわけです。これは王子台Ｈ４１号住居跡の前に１段階あるわけなんですが、愛甲大塚古墳の甕形土器に注目してみますと、Ｈ４１住居跡と同じか前に甕形土器を移動させてよいかと思いますので、愛甲大塚古墳は、もう一つ若くもってくることを思いつきました。思いつきですので、これ以上話すといわ

ゆる馬脚を露わすことになりますので、終わりにします。

村澤　ありがとうございました。次に東京国立博物館の望月さん、お願いします。

望月　今日は、最近の研究の成果を教えていただこうと参加しました。新しい成果を聴かせていただき、１０年前と様相が変わってきたと感じました。それは、４世紀代の前方後円墳が多くなってきて、みんな４世紀にいっちゃうのか、塚越古墳も瓢箪塚古墳も入ってしまったら、相模川の東と西で系譜関係はどうなるんだろうと非常に――― 。土器の面からも埴輪が少ないので、土器と対応させるのは難しいと思います。話が出ていた、周溝の火山灰の存在を比較することによって分析し、同じ火山灰だということがわかると併行関係をたどっていく上での重要な鍵になるんじゃないかと感じています。

神奈川県を各地別に話を聴いていますと、古い古墳のあるところとないところとでばらつきがある。これは相変わらず変わっていない。三浦半島に古い古墳があってもいいし、酒匂川流域にあってもおかしくない。ただみつかっていないだけか。今後の調査で新しい成果が出るかもしれません。

最後に、古墳は掘ってみなければ分かりません。愛甲大塚古墳が前方後円墳になってしまったことは墳丘からは判断できません。塚越古墳が本当に前方後方墳だとしたらたいへんなことです。また立花さんがレジュメに書いているように、小金塚古墳が前方後円墳かもしれないという考えを私も持っています。その他にも、実は円墳とされているもので、実は前方後円墳の可能性があるものが厚木市に一、二あるのですが、系譜関係で問題になってくると思います。１０年前に比べてわかってきたけれど、かえって混乱してきたという感じを受けました。今後の発掘調査でその混乱は修正されるんじゃないかと期待します。

村澤　これで今日の議題は終わりにします。

追記　本入門講座開催の後、新たな発見があったのでそれを紹介したい。

まず、逗子市と葉山町の境に２基の前方後円墳が発見された。名称は、「長柄・桜山第１号・２号墳といい、１号墳は全長９０m、２号墳は８０mを測る。双方とも壺形埴輪をもち、さらに２号墳はトレンチ調査の際、葺石が検出されている。築造時期は１・２号墳とも４世紀後半と考えられている。（増渕規彰　「速報　No. 5　長柄・桜山第１号・２号墳」

次に、秋葉山１号墳の周溝確認調査が行われた。くびれ部トレンチから鉄鏃、坩型土器が出土している。（合田芳正氏のご教示による。）

それから、厚木市温水のホウダイヤマ遺跡からは、墳丘の削平された前方後円墳が発見された。クビレ部の周溝から器台型土器・坩型土器・壺型埴輪が出土した。平本元一「厚木市ホウダイヤマ遺跡　第２３回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨　　1999. ９. １２」

表紙の写真

伊勢原市「**小金塚古墳**」出土の朝顔形円筒埴輪

編集後記

本書は、1998年2月22日に開催された平成9年度の神奈川県考古学会の「考古学入門講座・討論会」を成果集としてまとめたものです。早、2年の歳月が過ぎ去っており、この間には長柄桜山1・2号古墳をはじめ、数々の新発見がありました。神奈川の古墳研究にとっては喜ばしいことですが、発表者の皆様には多大なご迷惑をおかけしました。改めてここにお詫びし、お礼を申し上げます。　（E・G）

平成9年度考古学入門講座

神奈川の古墳

－その出現と展開－

討論会成果集

2000．3．5

発行　神奈川県考古学会（会長　寺田兼方）

講座担当（伊丹　徹・加藤　緑・村澤正弘）

編集　遠藤秀樹・後藤喜八郎

神奈川県考古学会事務局　平塚市北金目1117　東海大学文学部考古学研究室